

幕末期における森春濤

日野俊彦

初めに

森春濤（文政二年、一八一九〜明治二十七年、一八八九^①）が幕末期においてどのような位置にあったか。本稿はまず、今日でも幕末期における作品を容易に見ることができ、当時彦根藩の主導的役割にあった岡本黄石の漢詩と比較して、幕末期における春濤の心情の動きを明らかにしたい。また、明治元年に出版された漢詩集『銅碗龍吟』所収の春濤詩より、幕府の終焉から明治維新への過渡期に春濤がその状況をどう表現したか、『銅碗龍吟』の歴史的価値と併せて考えたい。

幕末期における森春濤について、入谷仙介は次のように述べる。^②

嘉永六年（一八五三）年、ペリーの浦賀来航を幕明けとし、安政の大震災、安政日米条約調印、安政の大獄、桜田門の変、薩英戦争、四国艦隊の下関砲撃、蛤御門の変、幕長戦争と重大事件があい次ぎ、幕府はその無力さを露呈、幕藩体制の変革が政治的プログラムによりやく上がってきた。時代は政治の季節、そうして思想の季節に一気に突入していったのである。漢詩も、というより漢詩こそは、時代を敏感に反映した文学であった。何となれば、漢詩は当時の文化を担う武士的知識人の文学であり、そもそも中国で芽生えたその初めから「詩は志なり」（詩経毛伝序）として、思想の表白であり、政治にコミットする文学たることを期待されていたのである。とりわけ時代を拓く思想に命をかけて、明日を知らぬ政治活動に日夜奔走した志士たちが、自分の精神のほとぼしりを託したのは漢詩であった。（中略）春濤の詩集『春濤詩鈔』二十巻をひもどく時、私たちが一驚するのは、そうした時代的情況がいつさい反映していないことである。（中略）大獄から維新に至る激動の時期、飛驒高山、越前に遊んだほか、ほとんど名古屋を動かなかった。激動をやりすごしたと言わねばならぬ。春濤のような人物が、

時局に対してこのような態度を取る時、単なる無関心ではなく、それ自体に意義があると考えるべきであろう。おそらく、入谷には後述する「枕上聴風鈴」詩のような春濤の間適の作品が念頭にあったのではあるまいか。一方、揖斐高は入谷の指摘とは対照的な意見を述べる。⁽³⁾

こうして時代状況への関心を強めていった幕末・維新期の春濤に、一つのチャンスが回ってきた。五十歳の慶応四年（一八六八）三月、春濤は尾張藩公に召し出されて三人扶持を賜り、藩校明倫堂の詩文会評掛に任じられることになったのである。そして、藩公徳川慶勝が北征の軍を発信させると、それに従軍し、本営の斥候をつとめた。春濤にも時代の転換に直接関与する機会が訪れたということである。（中略）戦場にあつても結局春濤は詩人であることを求められ、行動の人たることを期待されなかったのである。そして、そのことは春濤自身が一番よく自覚していた。これに先んじること十年、安政五年（一八五八）四十歳の次の詩には、騒然たる時代状況への関心と同調の思いを抱きつつも、詩人としてあるほかない自分自身との距離を意識せざるを得なかった、屈折した春濤の思いが表れている。

この意見には同じく後述する春濤の「諸公」詩や「甲子七月念一夕、聞京中十九日変、感激不寐、詩以紀事」詩のような作品が基準となっていよう。

本稿は両者のいずれが正しいかを判断するためではなく、むしろ、それぞれの観点を取り込み、より幕末期における春濤の心情を深く捉えたいと考えている。

一、幕末期における春濤の位置——岡本黄石の漢詩との比較を通じて——

森春濤については、近年、春濤の故郷の一宮市博物館（愛知県尾張一宮市）において春濤を含む明治漢詩人の展覧

会が企画されている。⁽⁴⁾このようにその価値が再確認されている春濤に比して、かつて春濤とともに明治漢詩壇の主導者であった岡本黄石の知名度は今日ではまだ低い。そこで簡潔な紹介をしておく。⁽⁵⁾

岡本黄石（文化八年、一八一〜明治三十一年、一八九八）名は宣廸。字は吉甫。通称は織部之介、後に半介。号は黄石。彦根藩士宇津木久純の第四子。兄には大塩平八郎の高弟でありながら、大塩が乱を起こす際には諫止し、そのために大塩の弟子に暗殺された宇津木矩之允がいる。十二歳の時同藩士で軍学師範であった岡本業常の養子となった。藩主井伊直弼が凶刃に斃れた後は、藩内を肅正、幕末の混乱を乗り切り、明治維新まで藩命を永らえさせた。明治十三年より東京に根拠を定め、同十六年に漢詩結社・麴坊吟社を開く。大沼枕山・春濤らとともに明治漢詩壇の推進役となり、八十八歳の天寿を全うした。その漢詩は「黄石斎第一集」から「黄石斎第六集」までの全十九巻に、彦根時代から明治二十年までの作品が収められている。その数は一一〇一首に及ぶ。⁽⁶⁾

先ず、慶応二年から明治元年にかけての春濤・黄石双方の動きを、主な詩題とともに示す。⁽⁶⁾

・慶応二年

【春濤】一月から八月まで文久三年より移り住んだ名古屋から動かず。九月 越前に遊ぶ。福井孝顕寺に寓し、松平春嶽の謁見を賜る。十二月 足羽川を下り、三国港に滞在。「丙寅九月、将游越前、留別城中諸子」「福井城下作」「孝顕寺寓居、与張南村夜話、用東坡定惠院韻」「臘月念六日、雨中舟下羽水、抵三国港」⁽⁷⁾

【黄石】第二次長幕戦争に彦根藩が従軍。その代表として京阪と芸州（広島）を頻繁に往来する。「丙寅五月、重次芸州廿日市駅 五首」「丙寅六月作」

・慶応三年

【春濤】吉崎・山代諸地を遊ぶ。この頃の作品を収めた「桃花流水集」には「丁卯三月 是歲三月中浣以後全軼」

とある。「三国港竹枝」「雨中、舟発三国港、抵吉崎」「山代坐湯詞」「三日、福井城下看桃、有感作短歌」

【黄石】京阪に滞在か。

・慶応四年

【春濤】三月 明倫堂詩文会評掛となる。六月？ 北越戦線へ向かう尾張藩軍に従軍する。明治元年九月 『銅椀龍吟』を編する。「維時」「從駕北征、時予為本営斥候」「戊辰重陽」「又用蘇老泉韻、寄某在越後軍営」⁽⁸⁾

【黄石】三月 朝廷から彦根藩より貢士として出仕するよう命が下るも、これを拒否。娘婿に家督を譲り、隠居の身となる。彦根の芹水荘を退隠後の住まいとする。「芹水荘 三首」⁽⁹⁾

次に双方の作品を取り上げ、彼らの考えを読み取る。揖斐の指摘にあるように、春濤が政治への関心を抱いたことを顕著に示すのは、安政五年に作られた「諸公」詩であろう。⁽¹⁰⁾

諸公

諸公底事走京華 諸公 底事ぞ 京華に走る

長短亭塵鬨馬車 長短亭塵 馬車鬨し

問著詩人渾不識 詩人に問著するも 渾て識らず

春江負手看桃花 春江手を負ひて 桃花を見る

お大名の方々はどのようにして京都に身を走らせるのか。宿場宿場は馬や車の音で大騒ぎである。詩人である私にその理由を問われても、全く判断がつかない。私は春の川辺にうしろ手をくんで、桃の花をながめるだけ。ここでは無関心の体をなした春濤であったが、時勢の変化は大きく春濤を揺さぶる。元治元年、京都を追われた長州藩が巻き返しを図る中、その勢力挽回を恐れた薩摩・会津・桑名藩と御所の蛤御門で戦った、禁門の変の報を聞き、

「甲子七月念一夕、聞京中十九日変、感激不寐、詩以紀事」詩を作る。⁽¹⁾

甲子七月念一夕、聞京中十九日変、感激不寐 詩以紀事。

甲子七月念一の夕、京中十九日の変を聞き、感激して寐ねられず、詩以て事を紀す

巍然桓武古神州 巍然たり 桓武よりの古神州

辺警誰無西顧憂 辺警誰か西顧の憂ひ無からんや

血路旌旗雲霧冪 血路の旌旗 雲霧冪

戟門風雨鬼啾啾 戟門の風雨 鬼啾啾

敗某休説存亡迹 敗某説くを休めよ 存亡の迹

累卵宜防危急秋 累卵宜しく防ぐべし 危急の秋

海上老鯨堪可戮 海上の老鯨 戮すべきに堪へたり

諸君唾手取封侯 諸君手に唾して 封侯を取れ

高くそびえる桓武天皇より続くこの都。外敵からの警護をするものたちは、どうして西に注意を払わないでよかろうか。敵の包囲を血まみれになりながら突破した旗指物には、雲が暗く覆いかぶさり、御所の門に吹く風雨の中、死者の魂の泣き声が聞こえる。一度勝負に負けたからには、今更その理由を弁明するのはやめるべきだ。現在の卵を重ねたような瀬戸際の状況を防がなくてはならない。日本を取り巻く海上には老練な外敵がおり、それらをまず討伐すべきではないか。諸君よ、手に唾して事にかかり、大名に取り立てられるような手柄を挙げるのだ。

この詩について、揖斐は「攘夷敢行のための激越なアジテーションを発するまでに至っている」と述べる。その背景

には拙論に述べたように、既に春濤が勤皇派の志士、藤本鉄石らとの交際により、政治に対する関心が高まっていたことによる。⁽¹²⁾しかし、伝聞の域を出ない素材のため、この詩は長州に同情する内容を持ちつつ、理屈だけが先走ったものになっている。早くもこの年の秋、春濤はまた「枕上聴風鈴」詩の中で、傍観者の体を表現するに至る。⁽¹³⁾その心情はかなり複雑なものといえる。

枕上聴風鈴 枕上に風鈴を聴く

惨憺中原逐鹿場 惨憺たり 中原逐鹿の場

西征鉄馬夜搶攘 西征の鉄馬 夜搶攘たり

醒来枕上風鈴響 醒め来りて 枕上に風鈴響き

秋満虚簷月転廊 秋は虚簷に満ち 月は廊に転ず

痛ましき京都の地。勇ましき騎兵たちは西方に遠征し、夜もがやがやとその行軍が入り乱れている。だが、酔いから醒めた私は、枕の上の風鈴の響く音を聞くだけで、秋は人氣の無い軒にも満ち、月の光は廊をめぐって差し込んでくる。

京都を中心とする混乱、長幕戦争に赴く兵士たちの行進をよそに、春濤は酒を飲む。そして、酔いが醒めれば軒先で秋の月を眺める。春濤の詩に見える傍観者の立場は、黄石「丙寅五月、重次芸州廿日市駅」詩「丙寅六月作」詩と比較すれば、より明らかとなる。

丙寅五月、重次芸州廿日市駅 五首 丙寅五月、重ねて芸州廿日市駅に次る 五首

其四

十年世態変 十年 世態変じ

邦国足艱辛 邦国 艱辛足る

千古興亡夢 千古 興亡の夢

孤生練漉身 孤生 練漉の身

江湖難晦跡 江湖 跡を晦まし難く

烏兔似奔輪 烏兔 奔輪の似し

只望安天下 只だ望む 天下を安んずるの

堂堂社稷臣 堂堂たる社稷の臣

この十年の間に世の有様は変化し、我が国には苦しみが満ちた。遙か古えから国家の興亡は夢のように浮か
んでは消えてゆき、寄る辺ない我が身はもみくちゃにされてきた。川や湖のようなところでも我が身を隠す
のには難しく、月日は回る車輪のように巡ってゆく。ただ、私は天下を安定できる立派な国家を担える臣下
の登場を望むのである。

丙寅六月作

一発百雷響 一発 百雷響き

彈丸不可侵 彈丸 侵す可からず

軍容渾異古 軍容 渾て古と異なり

兵器莫如今 兵器 今に如くは莫し

勝敗廟堂算 勝敗 廟堂の算

興亡天地心 興亡 天地の心

誰能平此事 誰か能く此の事を平げん

餘恨海波深 餘恨 海波のごとく深し

一度銃を放てば轟音が響き、その弾丸の中を敵が我が陣に攻め入ることはできない。軍隊の様子は全く私が学んだ昔の兵法に説かれたものとは違い、その兵器は現在のものに及ぶものはない。だが、勝敗というものは戦術ではなく、国家の中枢で謀られる戦略にあるのであり、国家の興亡は人知の及ばぬ天地の采配による。

誰がこの戦争を収めるのか。戦争が終わっても、その後も人々の苦しみは海の波のように深くあるのだ。

前者は安政の大獄から、主君井伊直弼の暗殺。その後の幕府と彦根藩との軋轢に対する批判と、一刻も早い日本の主導者の誕生を願う姿が描かれている。後者は兵学者でもあった黄石が、幕府の新式兵隊を目にし、もはや戦術だけで勝敗の決するような状態ではない。この戦争の根幹そのものの解決が急務であるのだと表現している。これらには彦根藩の代表として政治の当事者にあつた黄石の実感が読み取れる。逆に言えば、実体験の無い春濤の作品の限界が浮き彫りとなるのである。

一方、直接戦争に関与していなかった春濤が一兵士として尾張軍に属し、実際の戦場に立つのは慶応四年六月頃のことである。この年の一月に戊辰戦争が勃発し、同じく一月より尾張藩は世に『青松葉事件』と呼ばれる、勤皇派による佐幕派の処刑を含めたクーデターが起きている。この事件により、御三家でありながら尾張藩は朝廷側に立つことを強制される。⁽¹⁴⁾クーデターは一月末には終結し、四月に春濤は「維時」詩を作る。「維時」の典故は、『史記』卷二「夏本紀」の舜の治世を寿ぐ歌に基づくものである。⁽¹⁵⁾また、「南熏」も『十八史略』卷一にある、天下がよく治まり、民が富むようにと舜が歌った詩に基づく。⁽¹⁶⁾この詩の内容にも全く暗さというものがなく、晴れがましさに満ちた新たな時代を寿ぐ意図があるのであろう。

維時

維時四月属南熏 維時四月 南熏に属し

天賜旗章壯我軍 天賜の旗章 我軍を壮んにす

敵愾献功応有日 敵愾功を献ずること 応に日有るべく

青山万疊騎如雲 青山万疊 騎 雲の如し

これこの四月、我らは陛下の平和な御代のもと、朝廷を支える臣下となり、陛下より賜った錦の御旗は、我が軍の士気を盛んにする。陛下の敵に立ち向かい、戦の功績を献上するのは、きっとその日があるであろう。折り重なる峰々に向かう騎兵は雲のように群がっている。

そして、尾張藩は朝廷より幕府側についた北越諸藩を制圧するよう命ぜられている。その軍中にあった春濤は自分の社会上の位置を改めて認識することになる。

従駕北征、時予為本営斥候 駕に従ひて北征す、時に予本営斥候と為る

従軍氣象本麤豪 従軍の氣象 本より麤豪

敵地持螯飲濁醪 敵地螯を持して 濁醪を飲む

不信善詩真是我 信ぜず 詩を善くするは真に是れ我なるかを

江湖到处問春濤 江湖到る処 春濤を問ふ

戦に向かう兵士の気性は本より荒っぽく、敵地でも蟹を片手にどぶろくを飲んでいる。そのような兵士たちは、詩を上手く作るのが私であると信じてくれず、世間では到る所で「本当にあなたが春濤なのか」と質問するのである。

「江湖が春濤を一斥候になつて居やうと肯はぬのも無理のないことである」と評されたように、一兵卒の春濤と詩人の春濤とは乖離した存在であつた。戦国時代のような一兵卒から大名に出世するといった野心を、五十歳になつた春濤が持っていたか否かは定かでない。この軍旅は十一月末まで続くが、九月初めに春濤は名古屋にいる。これは春濤が兵士としてさしたる働きがでなかつたか、尾張藩の主導者である田宮如雲や、田宮とともに藩政の中枢にあり、春濤の弟子である丹羽花南が、春濤を戦場より避難させたか、いずれかであろう。⁽¹⁸⁾やがて、重陽の季節になり、戦場を退いた春濤は「戊辰重陽」⁽¹⁷⁾「又用蘇老泉韻、某在越後軍營」を作る。

戊辰重陽

秋過槐黄又菊黄 秋過ぎて槐は黄ばみ 又た菊も黄ばむ

故園風雨送重陽 故園の風雨 重陽を送る

十人唱和去年客 十人唱和す 去年の客

半上名場半戦場 半ばは名場に上り 半ばは戦場

秋は深まって槐が黄葉し、そしてまた菊も黄色の花を咲かそうとしている。故郷の庭の風雨の音を聞きながら、私は重陽の時を過ごす。去年の重陽に詩を唱い交わした十人のうち、半分は政治の場におり、半分は戦場にいるのだ。

又用蘇老泉韻、某在越後軍營 又た蘇老泉の韻を用ふ、某は越後の軍營に在り

欲写愁腸也不才 愁腸を写さんと欲するも 也た不才

索居強自对尊疊 索居強いて自から尊疊に対す

杜陵作客猶多病 杜陵客と作りて 猶ほ多病

王勃望郷纔有台 王勃郷を望むに 纔かに台有り

応恨白雲親舎遠 応に白雲の親舎を遠ざくを恨むべし

可無南雁戰場来 南雁の戰場に来たること無かるべけんや

最憐今日故園菊 最も今日故園の菊を憐む

似待君帰黄未開 君の帰るを待つが似く 黄未だ開かず

愁いに満ちた心を描き出そうとしても、それをできるだけの詩才がなく、一人寂しい居住まいにて、愁いを晴らすべく、無理に自分で酒樽に向かい合う。杜甫は重陽の折、戦乱を避ける旅人の身でさらに病がちであり。王勃も重陽の際には故郷より遙か遠くの地で、故郷の方向を見下ろすために高台の昇ることぐらいしかできなかった。きっとあなたは目の前の白雲が故郷の風景を遮っているのをつらく思っているであろう。しかし、南の故郷より北上する雁が、きっと私の手紙を携えて、君のいる越後の戰場に飛来することがあるはずだ。私は最もこの重陽の故郷の庭園の菊に心を痛める。あなたが帰るのを待っているかのように、その花はまだ開いていないのだ。

この詩の中で「半上名場半戰場」と詠いつつ、そのどちらにもいない自分を見つめている。その状況のもと、春濤は名古屋を根拠地としたで桑三吟社での作品を集めた『銅椀龍吟』を編むのである。

二、『銅椀龍吟』について

『銅椀龍吟』は、春濤と永坂石埭らの門人たちと交わされた漢詩集である。⁽¹⁹⁾そこには漢詩百十五首と和歌十首が収められている。所収詩の成立時期は詩社を開いた文久三年から、慶応四年にかけてであろう。この詩集の成立について

ては丹羽花南及び春濤の序文に詳しい。大受居士は丹羽花南の号である。

序

森髯先生集其社中之詩、為小冊子。命曰銅椀龍吟。蓋不以為自足也。余鞍馬倥傯之間、東西驅馳、不能撚髭搦管、与才俊之士較力於芸苑。意之所注、情之所鍾、欲有詩而不能、空付諸一瞥雲煙、每以為憾焉。今及覽此冊、流麗芊綿雄渾崢嶸、譬之百花粲爛四時之光景鍾美於一眼底。栽培濡滯之功、不亦大乎。雖然嫩紅軟紫、要是花卉色彩之常耳。未借以足形容先生變化之手。嘗聞吳道子画龍至其点睛、真龍倏忽自筆端化去。今此刻一成、社中駸々而進於芸。以現先生善誘之功、則人將仰視真龍之起吟於高空飄渺之際。其變化豈可彷彿哉。先生号桑三軒。為人美髯髯、呼做森髯先生云。戊辰十月識於殘菊香狼藉處 大受居士

森髯先生はその社中の詩を集められ、小冊子を作られた。『銅椀龍吟』と名付けられた。おそらく満足できるものではないという意味であろう。私が兵馬にまたがって慌ただしく東西を駆け巡っていた頃のことなので、髭をひねって筆を執り、詩才に富んだ人々と力を文芸の場に競い合うことができなかった。当時の私は詩心や情緒の深まったものを、詩にしたいとも出来ず、むなしくその思いをふと見た雲や煙に託すことしかできず、その度に心残りに思ったものだ。今この冊子を見るに及んで、その豊かに連なり、すらすらと滞りない美しさや高い山のような力強さは、譬えればあまたの花々が一年を通してはなやかに美しく咲く、その光景の美を一目の範囲内に凝縮したようである。その花々に水を恵み育んだその功績も、大きいと言わねばなるまい。そうはいうものの若々しい紅や柔らかな紫のような花の色は、結局は花や草が元からもっているものである。この譬えを借りてでは先生の各々の詩才を変化させた手腕を形容するのに充分ではない。以前吳道子が龍を描き、最後にその睛を書き入れると、本物の龍がたちまち筆の端より化して去っていった、と聞いたことがある。今この冊子が上梓され、社中の人々はすみやかに文芸の道を進んで

ゆく。先生の人々を善く文芸の道に誘う功績を表現しようとするなら、それは人々がちやうど本物の龍が高き空のはろばろとしたところで鳴き声をあげるのを仰ぎ見るようなものであろう。その変化のさまをどうしてあたかも見たままのように表現しえようか。先生は桑三軒と号される。そのお姿は美しい頬髭や顎髭をお持ちで、それにちなんで森髯先生とお呼びしている。戊辰十月、残菊の香の狼藉たる処にて記す。大受居士

古作者之詩、龍吟也。徒模擬古人之詩者、憂銅碗而已矣。雖然、非善憂之、誰誤為真龍吟乎。嗚乎吾輩模擬自勉、朝唱夕和。沾沾自喜者、非憂銅碗而何也。頃与同人来往、每一小集、成一小冊。每冊数紙、合冊成編。命曰銅碗龍吟。客罵曰是瓦釜雷鳴耳。焉得比乎海龍之吟。予謝曰瓦釜銅碗、要皆非真。姑仮鳴之。何效東野不平。果龍吟乎、果雷鳴乎。何復自弁。若夫袁倉山所謂落筆無古人。則予有俟乎他日。客退。書此為序。著雍執徐秋月森魯直識于名古屋之桑三之春多雨詩屋。

昔の作者の詩とは、龍の歌である。その実力もないのに古人の詩をまねようとする者は、銅碗を撃つのみではないか。そうはいっても、上手く銅碗を撃たなければ、誰が間違つて本物の龍の歌としようか。ああ私は古人の詩をまねようとして自ら励んでおり、朝に唱い夕に声を合わせる。そうしてしんみりと自ら喜ぶ私は、銅碗を撃つ者でなくて何であろうか。近頃社中の同人たちが行き来するうち、その度に小さな詩会を開き、そこで詠まれた詩で小さな冊子を作った。一冊子数枚であったが、それを合冊してこの書を編集した。『銅碗龍吟』と名付けた。訪れた人が口ぎたなく「これは素焼きの釜が雷のような音を出して鳴っているだけではないか。どうしてこんなものが海龍の歌と比べられようか」と悪口を言った。私は謝意を述べるとともに「素焼きの釜も銅の碗も、結局全て本物ではない。しばらく仮にこれらを鳴すまでのこと。どうして孟東野が不平を鳴らしたのを真似しようか。果たしてこれが龍の歌か、果

たしてこれが雷鳴かは、どうしてさらにまた自ら弁じようか。かの袁枚が『落筆無古人』と言ったようなことである。つまり私は他日の評価を待つだけのことだ」と言った。訪れた人は去って行った。この話を記して序とする。戊辰の秋、森魯直が名古屋の桑名町三丁目の春多雨詩屋にて記す。

『銅椀龍吟』は「似て非なるもの」の意味を持つ。⁽²⁰⁾ 社中の詩が集まったので、この詩集を作ったと春濤は述べているように、この詩集には春濤とその社中の人々による今体詩と古体詩、合わせて百十五首（春濤の作品は二十三首）、和歌十首を収める。所収の春濤詩には、戦争に対する感慨を、あるいは当時の時勢を距離をおいて見つめる姿を詠じた作品が数多く見られる。紙幅の都合上、全ての詩を紹介することはできないが、その中から幾つかを例示する。詩題は韻目を定めるために選ばれた句の一部を用いている。作品数及び番号は春濤詩のみを取り出したものである。

夜横琴八首より 其三

壮士如雲擢羽林 壮士雲の如く 羽林に擢んぜられ

敵場衝入賊交侵 敵場衝入して 賊交ごも侵す

可憐戦骨葬猶浅 憐れむ可し 戦骨 葬むること猶ほ浅きを

誰是善根修最深 誰か是れ善根 最も深きを修めん

塵劫百年摩詰指 塵劫百年 摩詰の指

繁華一代雍門琴 繁華一代 雍門の琴

長安少婦驚秋早 長安の少婦 秋の早きに驚き

燈下裁衣月打碁 燈下に衣を裁ち 月に碁を打つ

意気盛んな人々は雲のように集まり、天子の近衛兵に選ばれ、敵との戦場に突入して賊兵と互いに攻め守る。

私は心を痛める。戦死者のぞんざいに葬られていることを。誰か善行の心根で、手厚く葬ってくれないであろうか。永遠に続くと思われるかの様に長い百年の月日も、維摩居士が爪を弾いた、その瞬間のように短いものに過ぎず、一世の繁栄も雍門子周の奏でる哀しい琴の音のようにはかないものである。都の若妻は秋の訪れの早いのに驚き、出征した夫のために灯火の元に着物を仕立て、月光の元に砧を打つのである。

鵲南飛

我欲老江湖 我 江湖に老い

舟游趁大蘇 舟游して 大蘇を趁はんと欲す

不知横槩者 知らず 槩を横たふ者の

果是有詩乎 果して是れ詩有るかを

雲落明秋月 雲落ちて 秋月明らかに

柳疎驚夜鳥 柳疎にして 夜鳥驚く

此生真一粟 此の生 真に一粟のごとく

笑倒酒胡蘆 笑ひて酒胡蘆を倒す

私は川や湖の辺りに老いを迎えようとし、舟遊びをして蘇軾殿を追慕することにしよう。かつて曹操は赤壁の戦いの最中、詩を詠ったが、今戦っている者達に、はたして詩を作ることができようか。雲は去って秋の月は明るく輝き、まばらな柳の枝に眠る鳥は夜、その光りに目を覚ます。私の生涯など蘇軾殿が言ったように、本当に海の中の粟一粒のようなはかないものだ。私も蘇軾殿と同じく、笑って酒の入った瓢箪を傾けることにしよう。

撿柴扉

幽趣入秋足 幽趣 秋に入りて足り

宦情於我微 宦情 我に於ひては微なり

漁篷将月掲 漁篷 月を将つて掲げ

樵担負雲帰 樵担 雲を負ひて帰る

松気滴如雨 松気 滴ること雨の如く

荻花紛満衣 荻花 紛として衣に満つ

不知榮与辱 榮と辱とを知らず

白屋勝朱扉 白屋 朱扉に勝る

奥深く物静かな赴きは秋になつて満ち、役人になりたいとの思いは私にはほとんどない。漁師の船の覆いは月を背負っているかのように丸く、樵が薪を担いでいる姿は雲を背負つて帰るかのようなものである。松の香は雨のように我が身に滴り落ち、荻の花びらは、はらはらと散つて私の衣服に満ちる。栄光も屈辱も私には係わりのないこと。無官の私が住む粗末な小屋はお偉方の住む豪華な邸宅より優れており、栄華など羨むものではないのだ。

これらの作品には、もはや「維時」詩などに見るような高らかに戦争を詠う姿はない。また、黄石が戦場で詠ったような国家の行く末に対する憂憤も存在しない。あるのは戦争の惨状と、名利の争奪に走る人々の姿、それを静かに見つめる春濤があるのみである。いつ頃の発言かは不明であるが、後に春濤は自分自身を次のように述懐している。

○或人翁の詩を評して曰く、翁の詩を読むときは抹香と白粉の香を一時に鼻を衝くか如き想ひありと、翁曰く今

の詩を為すもの、身官職に閱歴あるもの多し、湖山は御維新の当時史館に入り、黄石は彦根藩の御家老なり、予か如き鵑閑鶴散を以て一生を送るべきものは、唯仙仏美人を借りて詩を作るなり、是れ予か天分なり、天分は人の左右し得るものにあらず、予も亦天分を全ふするを得は足れりと、味ひある言と謂ふべし⁽²¹⁾

自分を「俗世を離れ、落ち着いてゆつたりと一生を送るようにされたもの」と評し、「これは天が私に分け与えてくれたものである」と言い切る中に、自分のなすべき道を見出した春濤の姿が伺えるのである。

春濤の幕末期における活動を理解する上で『銅椀龍吟』は得難い材料を提供する。のみならず、『銅椀龍吟』所収の春濤詩は没後に編まれた『春濤詩鈔』に一首も収められていない。未所収の理由は明らかではないが、その空白を埋める意味でも『銅椀龍吟』は貴重な資料である。今回は春濤詩のごく一部を示しただけに過ぎない。唱和された他の詩人の作品を含め、機会を改めてさらに論じたい。

結 語

幕末期における春濤の心情を、同時期の黄石の作品と比較し、次に『銅椀龍吟』所収の春濤詩を以て読み解いてみた。そこには傍観者の立場を取るもの、積極的に時代に立ち向かうとする姿勢の見える作品と、様々な様相を呈している。その中のどの作品を基準とするかによって、先の入谷・揖斐それぞれの見解のように、自ずから幕末期における春濤像も違うものとなる。むしろ、どちらが是で、どちらが非であるというのではなく、双方を合わせ見ることによって、より様々な視点に立つて春濤像を見ることが必要であると考えるのである。

注

- (1) 春濤の生涯については、次の資料を参考とした。
『有隣舎と其学徒』、石黒萬逸郎、一宮高等女学校校友会、一九二五年二月
『明治漢詩文集』(明治文学全集六二)、神田喜一郎編、筑摩書房、一九八三年八月
『近代文学としての明治漢詩』、入谷仙介、研文出版、一九八九年二月
『明治の文雅 森春濤をめぐる漢詩人たち』展図録、一宮市立博物館編、二〇〇二年七月
また、詩集は『春濤詩鈔』(文会堂書店、大正元年五月)を用いた。なお、これは入谷仙介の解題とともに富士川英郎「ほか」編『詩集 日本漢詩』第十九卷(汲古書院、一九八九年七月)に収められている。
- (2) 入谷著七〇八頁
- (3) 入谷仙介、揖斐高「ほか」校注『漢詩文集』(新日本古典文学大系明治編、岩波書店、二〇〇四年三月)所収、揖斐高「森春濤小論」(同書四三三〜四四八頁)なお、本論における揖斐の指摘は全てこれに基づく。
- (4) 「生誕百七十年記念森春濤とゆかりの詩人達」展(一九八八年九月)、「漢詩人・森春濤の遺墨」展(一九九三年二月)、「明治の文雅 森春濤をめぐる漢詩人たち」展(二〇〇二年七月)などが開催されている。
- (5) 黄石の生涯については、世田谷区立郷土資料館編「漢詩人岡本黄石の生涯展」図録(世田谷区立郷土資料館、二〇〇一年十月)、世田谷区誌研究会編集部編「せたかい」第五十四号(世田谷区誌研究会、二〇〇二年六月)に拠った。また、詩集は「黄石斎第一集」、「第二集」を用いた。なお、これは富士川英郎「ほか」編『詩集日本漢詩』第十八卷(汲古書院、一九八八年十二月)に収められている。
- (6) 春濤については阪本鈺之助編「春濤先生年譜抄録」(『東洋文化』第三号、東洋文化振興会、一九五七年十月)名古屋市役所編『名古屋市政政治編第一』(名古屋市役所、一九一五年)等に、黄石については倉島幸雄編「岡本黄石年譜考」(『せたかい』第五十四号所収)等に拠った。
- (7) 慶応二年九月から慶応三年三月に作られた詩は全て『春濤詩鈔』巻十に収められている。
- (8) 慶応四年四月から明治二年七月に作られた詩は全て『春濤詩鈔』巻十一に収められている。
- (9) 「丙寅五月、重次芸州廿日市駅五首」「丙寅六月作」は「黄石斎第一集」に、「芹水莊三首」は「黄石斎第二集」に収めら

れている。

- (10) 『春濤詩鈔』巻七
- (11) 『春濤詩鈔』巻九
- (12) 「森春濤『十一月十六日拳児』詩考」(『二松』第十八集、二松学舎大学大学院文学研究科、二〇〇四年三月)
- (13) 『春濤詩鈔』巻九
- (14) 水谷盛光『実説 名古屋城青松葉事件——尾張徳川家お家騒動——』(名古屋城振興協会、一九八一年一月)、城山三郎『冬の派閥』(新潮社、一九八二年一月)はこの事件を題材としている。
- (15) 中華書局、一九七二年五月
- (16) 林秀一『十八史略』(明治書院、一九六七年七月)を参照した。
- (17) 「そして詩人春濤も此一大変革期に方つては、吟詠のみ耽つては居られなくなつたと見えて、従駕北征、時予為本営斥候、と題して、従軍氣象本廳豪、敵地持整飲濁醪、不信善詩真是我、江湖到处問春濤。と云ふのを賦して居る。江湖が春濤を一斥候になつて居やうと肯はぬのも無理のないことである。」(『有隣舎と其学徒』二二五頁)
- (18) 丹羽花南については、斎田作樂編著『花南丹羽賢付花南小稿』(太平書屋、一九九一年七月)に詳しい解説及び年譜がある。
- (19) 『銅椀龍吟』は一宮市立豊島図書館蔵本(現在は一宮市立博物館に寄託中)によつた。資料の複写等、ご助力を頂いた両館に謝意を表する。
- (20) その典故が『唐才子伝』巻四「皎然上人」か、皎然「曼銅椀龍吟歌」序に基づくかは不明である。参考として傅璇琮主編『唐才子伝校箋』(中華書局、一九八九年三月)の一部を挙げる。「公性放逸、不縛於常律。初房太尉琯早歲嘗隱終南山峻壁之下、往往聞湫中龍吟、声清而静、滌人邪想。時有僧潜憂三金以写之、唯銅酷似。房公往来、他日至山寺、聞林嶺間有声、因命僧出其器、歎曰『此真龍吟也』大曆間、有秦僧伝至桐江、皎然憂銅椀効之、以警深寂。緇人有戲譏者、公曰『此達僧之事、可以嬉禪、爾曹胡凝滯於物、而以瑣行自拘耶』時人高之」
- (21) 岩溪裳川「詩話 一名感恩珠」『作詩作文之友』第四号、明治三十二年一月、益友社 なお、全て原文のままとした。